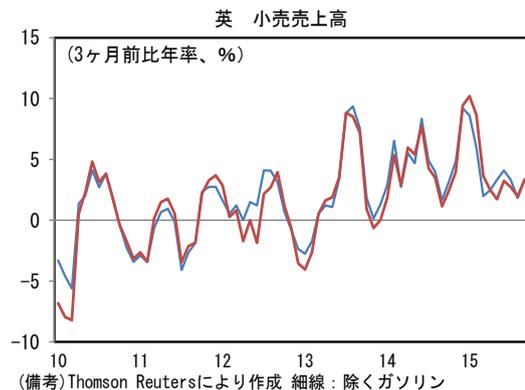
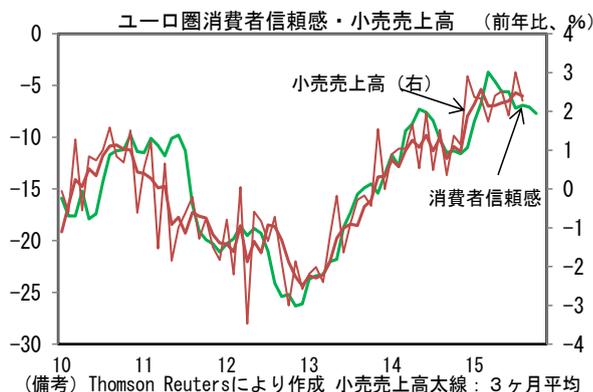


【海外経済指標他】～ECBラリー再び～

- ・ECB理事会は金融政策の現状維持を決定。詳細は後述。
- ・9月米中古住宅販売件数は前月比+4.7%、555万件と市場予想(539万件)を上回った。主力の戸建てが493万件(+5.3%)と強く伸び、8月の落ち込みを取り戻した。旺盛な住宅購入意欲を窺わせる結果であり、消費者の楽観を裏付けているが、在庫不足が解消されず、販売中央価格が3年前との比較で25%~30%も上昇していることに鑑みると、住宅取得は容易でない。住宅取得能力指数(HAI)も低下基調にある。供給側要因が引き続き販売を抑制するだろう。
- ・新規失業保険申請件数は25.9万件と前週(25.5万件)から僅かな増加に留まった。4週移動平均は26.3万件に低下して1973年12月以来の最低を更新。失業保険申請件数は過去数ヶ月に減少ペースが緩み、労働市場の改善余地縮小を示唆していたが、ここへ来て再び減少基調を強めている。NFPは年率2%程度の増加トレンドを維持しているとみられる。
- ・10月カンザスシティ連銀製造業景況指数は▲1と市場予想(▲9)を上回り、9月(▲8)から改善。ISM換算でも49.9に改善した。既発表の地区連銀サーベイをISMに換算したうえで合成した指数は46.7と低水準にあり、10月ISMの50割れを強く示唆している。



- ・10月ユーロ圏消費者信頼感指数は▲7.7と市場予想(▲7.4)を下回った。9ヶ月ぶりの低水準だが、株安の逆風を踏まえると、この程度のマインド低下はやむなしと言ったところ。もっともマインドが低下したとはいえ、肝心の消費は持ち直し傾向を維持している。
- ・9月英小売売上高は前月比+1.9%、除くガソリンベースでは+1.7%とそれぞれ市場予想を大幅に上回った。ラグビー・ワールドカップが影響した可能性があるものの、それを割り引いたとしても強い結果だ。除くガソリンベースの3ヶ月前比年率は+3.3%と堅調な領域にあり、なかでも百貨店(+10.9%)の強さは消費者が裁量的支出に前向きであることの裏づけとなっている。BOEの利上げを支持する結果だ。

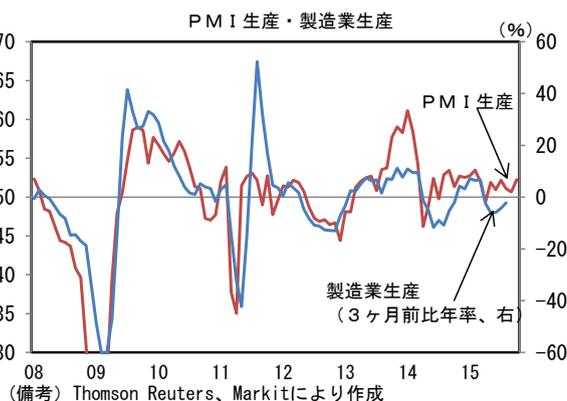
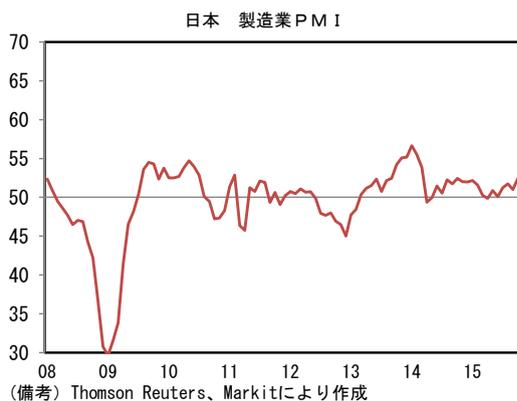


【海外株式市場・外国為替相場・債券市場】

- ・前日の米国株は大幅高。E C Bの追加緩和期待と米住宅指標を好感。欧州株はE C Bラリー。
- ・前日のG10 通貨はEURが急落。ドラギ総裁会見の冒頭で追加緩和が示唆されると、その後は一貫して下落。EUR/USDは1.13前半から一気に1.10割れを記録。EURに対するUSD買いは他の低金利通貨に波及、USD/JPYは120半ばを回復した。
- ・前日の米10年金利は2.026% (+0.3bp) で引け。欧州債ラリーに追随する場面もあったが、株高を背景に金利は一進一退。一方、欧州債市場は総じて堅調。独10年金利が0.496% (▲7.2bp) と5月末以来の0.5%割れで引けたほか、イタリア (1.450%、▲15.6bp)、スペイン (1.592%、▲15.5p) も大幅に金利低下。

【国内株式市場・経済指標他・注目点】

- ・日本株は欧米株ラリーに追随して高寄り後、高値圏もみ合い。
- ・10月の日本の日経製造業PMIは52.5と9月(50.1)から改善。生産(50.7→52.2)、新規受注(53.0→54.9)が改善したほか、雇用(49.6→52.0)が50を回復。なかでもポジティブなのは新規輸出受注(48.0→52.1)の大幅改善。シルバーウィークが例年より長めの連休となったため、9月と10月の季節パターンが異なり、9月が弱く、反対に10月が強くなった可能性が指摘できるが、それを勘案しても生産活動は持ち直しているとみられる。



- ・昨日ドラギ総裁は会見で「金融緩和の度合いを最新のマクロ経済予測が手に入る12月に再検証 (re-examine) する必要がある」、「何人 (a few members) かのメンバーは本日の追加刺激決定を主張」、「中銀預金金利のさらなる引き下げについて議論した」として追加緩和を強く示唆。その上でリスクについては警戒 (vigilant) を怠らぬにいたい」と強調した。vigilantはかつてトリシェ総裁が政策変更を行う際のシグナルとして使用した単語。そうした言葉を総裁が選んだことから判断すると、12月のQEプログラム拡充が確実視される。

- ・昨日の当レポート「[ECBからの朗報待ち](#)」でも指摘したとおり、グローバル投資家のリスク志向が安定する条件は、世界全体で“金融緩和が続く安心感”と“実体経済の回復”がバランスを保つことだ。金融緩和継続に対する期待はFEDの利上げ観測によって潰されてきたが、今回ECB（ドラギ総裁）がそれを相殺したことで、市場のムードは好転した。前半にECBのQEが順調にワークしていた頃、世界的に株価が上昇していた経緯を踏まえると、目先のリスクはアップサイドに転じた可能性が高いと筆者は考えている。日本株については、決算発表が本格化することもあり、そのタイミングが絶好だったと言えよう。

